

「文学」が足りない

藤田真弓

(2001年度 B, 2004年度 M, 2007年度 D)

2001年の夏。周りの友人たちが内定を貰い、残りの学生生活を満喫している中、私は就職活動をしていました。企業からの返事はいつも「不採用」。今思えば大した自己分析もせず、限られた業種の企業にしか応募をしていなかったのが当然です。

卒業論文を仕上げる時期になっても就職はまだ決まっていません。卒論指導の際、指導教授の福岡忠雄先生より「就職はご縁。どこに転がっているかわからないので諦めてはいけない」と励ましのお言葉を頂きました。卒論は無事完成し、晴れて優秀論文にも選ばれましたが私の就職活動は卒業式の後も続きました。2002年の4月1日、テレビで新卒者の入社式のニュース映像を見て不安と焦燥感で涙したことを今でも覚えています。

福岡先生のお言葉通り、私の「ご縁」は案外近くに転がっていたようで、友人たちから遅れること1ヶ月、私は兵庫県弁護士会の職員として社会人生活をスタートさせました。

配属先は「扶助課」。弁護士費用を支払う余裕のない人に対してその費用の立替えを行っていました。依頼者の抱えている法的問題や収入状況などのヒアリング、審査の立ち会いなどが主な仕事でした。困っている人を助けるやりがいのある仕事となるはずでしたが、半年も経たないうちに私は「疑問」を抱き始めます。依頼者の殆どが自己破産の為に弁護士を必要としていました。その中には(当時の)私と年の変わらない若者も多くいました。自己破産を安易に考えている人。自暴自棄になっている人。健康なのに仕事に就こうとしない人。彼らを見て考えました。「どうしてこの人たちはこうなってしまったのか」。そして結論を出したのです。「この人たちには文学が足

りない！」と。

福岡先生のお言葉には記憶に残るものがたくさんあります。学部時代のゼミでは文学を読む大切さをお話し下さいました。先生曰く、「私たちが人生で会う人の数には限りがあります。けれども文学を読めば、色々な国、職業、時代の人たちと「出会う」ことが出来、そこから様々な生き方を学ぶことができるのです」。文学は決して浮世離れの学問ではなく、人が生きて行く上で必要なことを教えてくれる実用的な学問であるとその時強く思いました。20歳そこそこの若造の分際で生意気にも「文学が足りない」などと考えた時も先生のこのお話を思い出していたのだと思います。彼らの人生にもっと文学があったなら、例えばジュードに、マギー・タリヴァーに、アダム・ビードに出会っていたら、違った道を歩むこともあったのではないか。文学にはそれだけの力がきつとある。そう思うと文学に囲まれて過ごした学生時代が恋しくなり、猛烈に関学英文に帰りたくなりました。

修士課程に入学してから今日まで長いようであつという間の12年でした。毎日の授業について行くのが精一杯だった修士課程時代。何をしている時も博士論文のことが頭を離れなかった博士課程時代。今では日々の非常勤の仕事に追われ、研究が疎かになっていることを反省することも少なくありません。30代も半ば過ぎ、22歳のあの日のように不安や焦りを感じていた折、福岡先生より「研究者としての将来は30代で決まる」という趣旨のお話がありました。先生のお言葉のおかげで、落ち着いて今後どのように文学研究と向き合っていくべきかを考えることが出来ました。これからも関学英文の名に恥じぬよう研究者、教育者として成長を続けたいと思います。不安や焦燥感を感じた時は泣くのではなく、大きく深呼吸をして自分に問います。

「今の自分に文学は足りているか？」